

P2-044

小児がん治療における化学療法が歯牙形成に与える影響

森本 節代¹、高島 由紀子¹、平野 慶子²、
吉田 衣里¹、森川 優子²、仲野 道代¹¹岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 小児歯科学分野、²岡山大学病院 小児歯科

【目的】

近年、小児がんに対する化学療法の進歩により、生存率が大きく上昇している。しかしながら、小児がん経験者において放射線照射や抗がん剤治療などにより、内分泌障害、肥満、成長障害などの様々な晩期合併症が起こることが明らかとなってきた。一方、歯科的晩期合併症としては、矮小歯、短根、形成不全などが報告されているが、化学療法と歯の形成障害に関連についての詳細は明らかとなっていない。本研究では、小児における化学療法と歯の異常との関連について小児がん患者のデータをもとに分析を行ったのでこれを報告する。

【対象と方法】

本研究は、岡山大学生命倫理審査委員会の承認を受け行なった。研究開始前に代諾者である保護者の同意を得られた小児がん経験者4名に対し、口腔内診査およびパノラマエックス線の撮影を行った。これらの患者は、神経芽細胞腫、急性リンパ性白血病、あるいは急性骨髄性白血病の治療として、生後2ヶ月から2.5歳間（中央値：1歳）に化学療法が施行された。歯の異常については、パノラマエックス線により評価した。

【結果】

4患者において、シクロフォスファミドおよびブスルファンを用いた化学療法を行なった期間は、6か月から15か月（平均9か月）であった。歯の異常については、第2小臼歯の欠損が全ての患者において認められたが、第1小臼歯については2患者において認められた。さらに、矮小歯と短根は、それぞれ3患者に認められた。また、歯胚形成が開始する時期として第1小臼歯が0歳から1.5歳、第2小臼歯が0.5歳から2.2歳、さらに第2大臼歯は0.7歳から2.7歳と一致する2ヶ月から2.5歳において化学療法が行なわれていることが明らかとなった。

【考察】

以上の結果より、化学療法施行時期が歯の発育に影響を与えることが明らかとなった。今後は、化学療法で用いられた薬剤のうち、最も歯の形成に影響を与えるものを特定していきたいと考えている。

P2-045

成長発育期の歯の形成に関する異常の早期発見の有効性

上田 公子¹、河原林 啓太²、谷崎 彩²、岩本 勉²¹徳島大学病院 小児歯科、²徳島大学大学院医歯薬学研究部 小児歯科学分野

歯の健康は全身の健康と深く関係があり、生涯を健康で過ごすために大切な器官である。歯科における二大疾患であるう蝕と歯周病について、その病態メカニズムの解明が進み、適切な口腔ケアによってこれらの歯科疾患を予防できることが明らかとなってきている。これらの口腔の健康に関する考え方は多くの国民にも浸透してきており、ホームケアとして行う日々の歯磨きに関して、国民の意識も高まってきている。このホームケアを容易にするためには汚れが付着しにくい歯並びを獲得すること、つまり、歯並びに乱れがあれば、汚れが付着する領域も広くなり、さらには歯の清掃も難しくなってくる。したがって、綺麗な歯並びを獲得することが口腔ケアを容易なものとし、歯科疾患のリスクを下げるためにさらに重要な要素となる。

過剰歯は比較的多く遭遇する歯数に異常をきたす疾患で、その存在位置によっては永久歯の萌出障害や歯並びの異常の原因となる。そのため、治療として過剰歯の抜歯を行う必要があるが、抜歯をした後に歯並びに対する治療が必要になる場合も少なくない。しかしながら、なかには抜歯をした後に、歯並びに生じた異常が自然と改善する症例も少なからず存在する。そこで、われわれは過剰歯を主訴に当院を受診した患者のうち治療前・後の経過を観察がすることができた症例について、術前の過剰歯の状態と過剰歯に隣接した永久歯の状態について調査を行った。その結果、隣接する永久歯が萌出する前で、さらにはその隣接する永久歯の歯根形成量が1/3未満の段階で過剰歯を摘出した方が、隣接永久歯に生じた異常が改善されやすいことを見出した。

近年は診断技術の向上により、疾患の早期発見が可能となり、早期に対応することが可能となってきた。成長発育期における障害は早期に改善を図ることによって、その後の成長発育によって自然修復が期待でき、複雑な追加的な治療を必要とせず、健全な歯列・咬合の獲得が期待できる。過剰歯を含め無症状で進行する疾患に対しては発見の時期や対応の遅れが後に様々な影響を及ぼすため、永久歯交換期にはエックス線検査を行い、疾患の早期発見に努める方が国民の健康や医療費削減にもつながるものと考えている。

本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認（課題番号1581）を得て行なわれた。